

OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

C	O	N	T	E	N	T	S
私の読書癖〔竹中 洋〕							2
川の章：鶴殿のヨシ原焼き〔岡田仁克〕							3
万人にとっての[意義ある人生]のために - 21世紀の医療環境(8)〔牧 彰〕							4
絵本と私〔西山裕子〕							5
本との出会い〔西谷 仁〕							6
外国雑誌バックナンバーの移動及び廃棄について							7
本学教職員著作寄贈							7
他大学図書館訪問記(12) 関西医科大学附属図書館の巻							8
書評「超入門Microsoft Vision 2000」〔山本隆一〕							9
シンポジウム「EBMにおける医学薬学図書館員の役割」に参加して〔田嶋泰子〕							10
お知らせ							11
図書館業務日誌							11
編集後記							12



私の読書癖

竹 中 洋



私の趣味は間違いなく読書である。可能な限り勘定してみると、西暦2000年中に買い上げた本は63冊ある。読んでしまえば捨てる雑誌の類はこれに含まれないので実際はもう少し多い。また、新聞連載は「下天は夢か」以後何故か日本経済新聞朝刊を好んでおり、週に5回は阪急の駅で新聞を買うことになる。因みに家庭での愛読紙は朝日新聞である。夏目漱石は別格として朝日の連載小説は全く面白くない。

少し脱線したが正直なところ私の読書癖はつくづく悪食である。むしろ傾向がないと言ったほうが正しい。作家として読み続けているのは塩野七生とパトリシア・コーンウェルで、残念ながら昨年読み終えてしまったのが藤沢周平である。塩野さんの小説には分かりやすい西洋がある。昔四苦八苦したバルザックなどの登場人物に纏わる長い前書きがない。単刀直入な「歴史小説」が私にあっていいる。秋に長女とイタリアの学会に行った時、ヴェネチアもフィレンツエもマルコ・ダンドロ殿と歩いている錯覚がした程である。しかし対談ものは一切読まないことにしている。会話は絞り出すような迫力がなく物足りない。一方、コーンウェルの小説には推理以上に知的満足がある。この小説に登場する分子生物学的アプローチに関する記述は日本の医療にある学問の閉鎖性を知るのに適当である。

さて、最近の思い出に残る3冊を挙げてみる。1冊目は「東京アンダーワールド」、我らの英雄力道山殺人事件の周辺や、保守的政党人の胡散臭さ、夜の銀座の恐さがよく分かった。しかし赤坂シャンピアホテルには20年ぶりでもう一度だけ泊まりたいと思う。2冊目は「銃・病原菌・鉄」壮大な人類学の断面である。現在のニューギニア高地人が発した「何故自分たちは何も発見出来ず、西欧ではそれが可能であったのか」の疑問を証明するに足る力作であった。著者のダイヤモンドが所属しているUCLA解剖学教室は私の留学先と異なる棟の同じ階にあったことも一因であるに違いない。残念なことは本文中に「日本では約1万4千年前に世界で最初に土器が生産されていた」との記載が一度ならず出てくることである。あの黄金の腕を持つ似非考古学者の被害者がここにいることが分かって恥ずかしかった。学問には一徹な正直さが要求される所以であろう。

3つ目は日本の歴史についての網野善彦の数冊の本がある。数年前から続いている一様でない日本がテーマである。正確ではないが「万葉集の大王は天皇と称していない」、「西日本と東日本では言語も生活習慣も異なる」、「東北・北海道と東日本と西日本と九州・西南諸島」、「百姓は農民ではない」などの問題意識で私が習った日本史の非常識さが浮き彫りにされる。余りの新鮮さにこの分野がようやく科学性を獲得したと思うほどである。

最後に正月は例年大作に挑戦することにしている。中学3年生の「静かなるドン」以来の習慣で、今年はジェイムズ・エルロイ「わが母なる暗黒」とローリー・ギャレット「カミングブレイグ」上下を選んだ。残念ながら1月8日現在読了していない。何故か？、時間が無いわけではない。ここ2週間新幹線に乗っていないことと、悪夢の15連チャンの忘年会・新年会のせいだとしておこう。断って置くが食生活では私は正真正銘の悪食ではない、しかし魯山人のような人並みはずれた美食家でもない。至福の時は眠る前の10分間の読書である。最愛の妻子と雖もこの時間を奪うものには不機嫌で答えることにしている。今年も後356日、何冊の本に出会うことができるか楽しみである。

(たけなか・ひろし 耳鼻咽喉科教授)

川の章：鶺殿のヨシ原焼き

岡田仁克

高槻市に引っ越して7年が過ぎようとしている。現在私は高槻市の外れの、眼下に淀川の見下ろせるマンションの一角に住んでいる。そもそも高槻に引っ越す際、このマンションを選んだのは淀川が見下ろせたからである。最寄りのバス停からは30分に一本しかバスは無い。不動産屋とのトラブルもあった。にもかかわらず、ここを選んだ。私は大阪府下の片田舎で生まれ育ったが、そこには大和川が流れていた。子供の頃は大和川の川原でよく遊んだものだった。その後金沢市という北陸の小都市に移り住んだ。金沢には犀川と浅野川という二つの川がある。最初は浅野川の近くに、所帯を持ってからは犀川の近くに住んだ。浅野川に沿う町並は静かで風情があり、一方犀川の河畔はよく整備され日曜日の昼下がりには家族連れでにぎわっていた。いつも私は川の流れと共にあった。

高槻を流れる淀川の川原には鶺殿（うどの）と呼ばれるヨシ原が広がっている。広さは約75ha、甲子園球場の18倍もある。この鶺殿のヨシ原が淀川に大自然の雄大さと心むむ景観を付加している。鶺殿のヨシはすだれの「よしず」の原料としても評判が良く、またかつては雅楽の「篳篥（ひちりき）」の吹き口として宮内庁にも献上されていたとも聞いている。ところが淀川の治水と開発が進むにつれ水量が減少し、鶺殿が乾燥し始めた。このためヨシの成育が悪くなり、代わってカナムグラやセイタカアワダチソウが繁殖し始め、ヨシ原が絶滅の危機に陥った時期もある。そこでこれらの雑草を退治しヨシの成育を促すねらいで戦後、地元住民の手でヨシ原焼きが始められ今日に至っている。効果があったのか、一頃よりはヨシが復活してきているらしい。このヨシ原のうち約38haを焼くのであるが、これがちょうど我が家のまん前に当たる。たいてい点火は午後2時を過ぎるが、昼過ぎには気の早い人がポツポツと現れ、点火の頃には堤防は見物人で一杯になる。見物客は5千人にもぼるそうだ。我がマンションでは当日は風向き注意の警告が出る。うっかりベランダからのんびり見物を決め込んでいると、モロにススと煙にまみれてしまうおそれがある。洗濯物を干すなどもってのほかである。点火してからはアツと言う間に火が回るかと思いきや、意外と燃え広がるのに時間がかかる。1時間位は燃え（燃やし）続けている。オレンジ色の炎はビルの5階ほどの高さに燃え上がり、パチパチという音や熱までも我が家に伝わってきてそのエネルギーの強さを実感させる。堤防の見物客はかなり熱いに違いない。焼いた後は文字通りの一面焼け野原と化し、少し前までは枯れ草色のじゅうたんのようであったヨシ原が巨大なすずりのようになってしまう。これはこれで鮮やかなもので、一種のカタルシスさえ感じる。ところがここ2、3年、どうにもすっきりしない。あちらこちらで焼け残りがあるのだ。どうやらカナムグラやセイタカアワダチソウが燃えにくいようである。去年もずいぶん燃え残っていたので、雑草が再び勢いを増しているのではないだろうか。鶺殿のヨシ原焼きは毎年2月中旬か下旬の日曜日に行われるが、この原稿の執筆時点で日取りはまだ未定である。一見の価値はあるが、ちょっと交通の便がよろしくない。特にヨシ原焼きの日は周辺道路が通行止めになってしまう。駐車場もない。しかも見物客がヨシ原焼き終了後バス停に殺到するので大変な目にあいかねない。お勧めしにくい理由だ。

さて淀川から目を転ずると、我が家から天王山が見える。子供の頃は実家近くの信貴山でよく遊んだものだった。北陸では白山や立山にもよく登った。思えば私はいつも山と共にあった...（ホンマかいな？）。しかし山の話は今はやめよう。この受験シーズンに、ヤマの話は私がするものではない。

（おかだ・よしかつ 第2病理学助教授）

註）校正の時点で今年中止と発表されました。周辺住民からの苦情が原因だそうだが、ちょっとさみしい気がする。

万人にとっての [意義ある人生] のために - 21世紀の医療環境 (8) -

牧 彰



長寿の木 [イチョウ] の葉を象徴したバス・ストップ上屋

絵本 [葉っぱのフレディ] が数年来のベストセラーです。「木の葉の芽生えから落葉まで」を擬人化して、[生命の仕組み] や [人生の意義] などが誰にでも分かりやすく描かれています。

今までは、生物の細胞死を表わす学術用語としてはネクローシスしかなく、[死] についての学問上の関心はあまりありませんでした。しかし、近年の光学技術の進歩などにより、ネクローシスとは明らかに異なる細胞死が解明され、アポトーシスと命名されました。

ギリシャ語が語源のアポトーシスは、樹木の葉が紅 (黄) 葉してやがて散る現象を表現したものです。葉は病気や風で散るのではなく、翌春の発芽力を蓄えるために自ら落葉するという意味が込められています。したがって、受動的なネクローシスとは対照的に、アポトーシスは能動的な自壊過程であるといえます。風で強引に散らされる葉はネクローシスであり、紅 (黄) 葉して自然に散る葉はアポトーシスなのです。

生物の生きる名分は、ひとえに [種の保存] にあります。アポトーシスは偶発的な細胞死ではなく、遺伝子の段階でインプットされた細胞死であるため、生理学的に重要な意義があります。紅 (黄) 葉が古来より詩歌にも謳われ普く日本人に愛でられてきたのは、種を次世代へ健全に継承するための自己犠牲という大いなる [自然の摂理] に、人は自ずと感銘させられるのでしょう。

現代人は、本人の好むと好まざるとに係わらず、「病院で生まれ、病院で死ぬ」宿命を負わされています。病院は人生の [始発駅] であり、人生の [終着駅] でもあるのです。日頃、肉親の誕生や死に直接立ち合うことが少なく、ペットの飼育が許されない居住環境に余儀なく住わされている私たちは、生命について厳粛になる機会に欠如しています。人の誕生は健全な生命の自然の証であり、また、自然の摂理としてのアポトーシス (尊厳死) を素直に受容することこそ大切です。

赤穂市民病院を象徴する樹木は、古来より植えられてきた中国原産の [イチョウ] です。[イチョウ] の化石は、日本・北米・欧州などからも出土していて、[イチョウ] は地質学上は古生代の末頃から恐竜と同時代の中世代ジュラ紀に大いに繁栄し、その後の氷河時代を生き抜いてきた文字通り [生きている化石] です。また、明治の中頃に [イチョウ] に精子があることが発見され、日本だけでなく世界中を大いに湧かせた [摩訶不思議な植物] でもあります。その樹勢は極めて強く、土壌を選ばず良く育ち、耐寒性・防火性・耐乾性に優れ、公害や病虫害にも極めて強い落葉高木です。春の鮮やかな新緑・夏の涼しげな緑蔭・秋の黄金色の葉・冬の天を指す凜とした美しい木立を形成する長寿の木 [イチョウ] は、必ずや患者の「病んだ心身に宿る心を励まし、生命の尊さを自覚させ、生きる気力を培う」ことでしょう。

近年の異常気象は、日本の誇る錦秋にも少なからず影響を及ぼし、紅 (黄) 葉もいささか精彩さに欠けているように見受けられます。時には、中秋に桜の開花を見るのには驚きです。地球の環境は、日本の四季は一体どうしたことでしょうか。おそらく、これも地球温暖化の顕著な兆なのでしょう。

思えば、私も人生の紅 (黄) 葉期にあります。あえて狂い咲きは望みませんが、せめて美しく紅 (黄) 葉して、少しでも遅い落葉を期待したいのが本音です。人は「死ぬために生きている」のではなく、「生きているから死ぬ」のです。より豊かな [意義ある人生] のために、自然の摂理に従い心置きなく尊厳ある [死] を受容してこそ、真に [生] を享受できるのではないのでしょうか。

(まき・あきら 元日建設社員 赤穂市民病院設計担当)

絵本と私

西山裕子

私の記憶の中で、最初に絵本が登場したのはいつ頃だろうか。幼児期に1年半程入院生活をした。安静が必要な私に母が色々な絵本を読み聞かせてくれた。「桃太郎」「一寸法師」「不思議の国のアリス」「シンデレラ」、中には挿絵は鮮明に記憶されているのに、タイトルが分からない本もあり、読んでくれた母さえも記憶していない。絵本は私の中に、この頃から住んでいる。

その後学童期に入って、父に連れられて市の図書館に通うことが楽しみになった。岩波こどもの本が好きでよく借りた。「あまんじゃく」「ごんぎつね」「ききみみずきん」等々、これらの本は今でも同じものが販売されており、書店で見つけたときは嬉しくてまとめ買いした。その後はお決まりの伝記であり、書棚の端から順番に読んだ。「キュリー婦人」「ヘレンケラー」「野口英世」「シュバイツァー」、勿論「ナイチンゲール」・・・想い出していくとこの頃から医学に対して関心があったのかと改めて確認させられる。そう言えば、毎年のサンタクロースからのプレゼントも、その時は何の不思議も感じなかったが決まって本であった。

就職し小児病棟の配属となり、子供達に絵本の読み聞かせをする機会ができた。面会時間終了後、母を追って泣く子を膝に乗せてその子の好みそうな絵本を選んで読む。最初は号泣していた子供が少しずつ落ち着いて、読み終わる頃には笑っていることもよくあった。準夜勤務の時は、就寝時間に幼児の子供達をベットに就かせて、その時々季節や行事に関連した絵本を選んで読んだ。業務が繁雑な時にはその時間も惜しいときもあったが、そんな時程、努めてこの時間を作った。「絵本が終わったら、静かに寝ようね」と約束して読み始めると、読み終わらないうちに子供達は安らかな寝息をたてていることしばしばであった。そしてこの5分程の時間が私自身の精神的な安定にもなり、その後の業務がスムーズに運んだように記憶している。

看護教育に携わるようになって、小児看護の講義をする機会を得た。核家族で子供に関わる機会の少なかった学生や、中には子供は苦手という学生もいる。小児看護は特殊で難しいととらえて欲しくない、どうすれば小児看護に興味をもってもらえるか考えた。そこで誰もが子供であったことを思い出し、小児看護の素晴らしさを理解してもらうために、講義の導入に講義内容に関連した絵本、或いは季節感を感じることのできる絵本を読むことにした。教室に入った時は賑やかだった学生達も、絵本が始まると静かに聞き入っていく。その後の講義もしやすくなり、一石二鳥となる。但し、卒業していった学生が講義の思い出を語ると、絵本のことしか覚えていないというデメリットもあるが・・・。絵本も良書が多くなり、それだけで十分看護の教育になるものもある。子供の発達の理解には「はじめてのおつかい」、母子の絆については「ラブ・ユー・フォーエバー」や「てぶくろをかいに」「ずーっとずーっとだいすきだよ」、命の尊さには「葉っぱのフレディ -いのちの旅-」「チャーリー・ブラウンなぜなんだい？ともだちがおもい病気になったとき」「ぼくのいのち（細谷亮太作）」挙げれば切りがない。これらの本はついでの時に書店に立ち寄り探しに行く。この時間は繁雑な日々の私自身の癒しの時間にもなっている。



こうして考えていくと、絵本は私の人生に豊かさを与えてくれたとつくづく思う。幼い時は安心感を与え、成長してからは感性や情緒、洞察力を養ってくれた。看護教育も質を重視される時代となった。“こころ”“智慧”“技”をバランスよくもっている看護者を育成していくことが役割だと考える。そのためにも絵本の読み聞かせを続けていこうと思っている。学生のために、そして自分自身のためにも・・・。

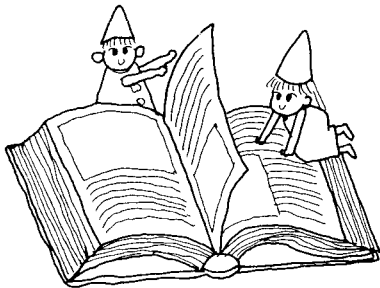
(にしやま・ゆうこ 附属看護専門学校教務課長)

本との出会い

西谷 仁

僕が思っているだけかもしれませんが、医師という職業に就いておられる方の中には、その余りある才能がゆえ医師だけに飽きたらず物書きとしても活躍されている方が大勢いらっしゃると思います。古くは森鷗外、最近では北杜夫や渡辺淳一などほかにもたくさんおられます。そして僕にも文才が...、と言いたいところなんですけれども残念ながら文才なんてこれっぽっちもありません。従いましてこれから始まる拙筆に対して皆さんが寛大な心をもって読んでいただければ幸いです。

おそらく僕はあまり本をよむ方ではないと思います。その数少ない読破した本の中ではありますが、ある一冊の本との出会いについて書かせていただきたいと思います。その本は「ガンの神秘的扉をひらく」という本で、アメリカの国立衛生研究所の外科部長（当時であり現在はわかりません）のステイブン・A・ローゼンバーグ博士が書かれたものです。日本で出版されたのは今から七年ほど前だったと思います。当時あまり本屋にも図書館にも足を運ばなかった僕がこのような本



に出会ったきっかけは、NEWSWEEKだったかVIEWSだったかは定かではありませんが、何気なしに読んでいた雑誌でした。僕は大学受験勉強の真只中として、自分では生物学に少し自信をもっており（あくまで当時）免疫などにいささか興味を示していました。その雑誌の新刊書紹介の欄に僕の眼を引くフレーズがあったのです。「免疫療法でガンが消えた」と。初めはどうせうさんくさい民間療法か何かだろうと思いましたが、どうも出所は怪しくなさそう。読めばガン治療の最前線だ

と書いてある。免疫は得意だし、よーし読んでやろう、と思い立ち書店で購入することとなりました。本の内容はといいますと、博士がレジデント時代に出会った進行ガンを自己治癒してしまった患者にヒントを得て、IL-2の大量投与による進行ガンの治療を思い立ち、それでは効果が得られず、つぎにIL-2とLAK細胞の併用を行い副作用のコントロールに苦しみながらも奇跡的に悪性黒色腫の転移腫瘍を消失させ、今度は腫瘍浸潤リンパ球に腫瘍壊死因子遺伝子を組み込んだ物とIL-2を併用する遺伝子治療に踏み切っているという内容でした。当然高校レベルの知識しかない僕は、知らない用語の大洪水に吞まれて溺死寸前でした。しかし瀕死で打ち上げられた浜辺で僕が得たものは大なる刺激でした。分厚い本の中で博士は自分の愛する家族のこと、恩師の暖かい取り計らい、優秀なスタッフへの最大級の尊敬や信頼、患者一人一人に対する深い思い入れ、とりわけ治験に同意をしてくれたのに副作用に苦しみながら病状が回復せず亡くなられた患者とその家族に対する何とも言えない感情に多くのページをさいてありました。当時の僕には医学的な内容はわからずとも、多くのものを得た気がしました。

学校などで忙しい昨今では僕は時間が限られているのに目当ての本もなくブラリと本屋に本を買いに行こうとなかなか思い立たなくなりました。それに伴って、刺激を与えてくれる本との偶然的出会いがなくなる代わりに、情報は与えてくれる本との必然の出会いが多くなった気がします。自分の未熟さに本との出会いの場に足を運ぶ必要性を痛感する今日この頃です。

（にしたに・ひとし 5回生）

外国雑誌バックナンバーの移動及び廃棄について

図書館の二階に配架されている、外国雑誌（1989年 - 2000年）の配架スペースは、あと一年で満杯になります。これを解決するために関係者と協議の結果、以下のような計画を立てました。

1. 移動及び廃棄計画

1) 二階の外国雑誌1989年から1993年までのものを、地下一階の集密書架に移動する。(約8,800冊)

2) 移動雑誌の収納スペース確保のため、地下一階の別紙雑誌を廃棄する。

別紙雑誌リストの内容

a) 過去三年間で中止したタイトルのバックナンバー（所蔵年から1988年まで）

b) 英語以外の外国雑誌（所蔵年から1988年まで）

（合計 約8,300冊）

3) 具体的作業

1) 各教室に廃棄予定リストを配布し、研究者の意見を聞く。その結果、廃棄しては困るものについては、希望教室へ移管するか図書館に残す。

2) 今年春にかけて、廃棄作業を行い収納スペースを確保する。

3) 八月上旬に二階の移動雑誌を地下一階に移す。

以上が図書館の移動及び廃棄計画です。みなさまのご協力をお願いいたします。なお、この件については、保存スペースの確保が困難なため、廃棄をすることについては、法人関係者の了解を得ております。

新規購入雑誌

次の3タイトルを2001年1月より新規に購入することになりました。

1. Bone marrow transplantation vol.27(2001) -
2. Ophthalmic research vol.33(2001) -
3. Clinical engineering vol.11(2001) - (国内誌)

本学教職員著作寄贈

竹中 洋（耳鼻咽喉科学）

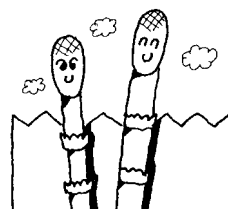
コンパクト臨床アレルギー / 竹中 洋 他編 2000

太田 富雄（本学名誉教授）

メディカ・メンテ；望ましい医療を求めて / 太田 富雄 他著 2000

勝岡 洋治（泌尿器科学）

Prostate cancer 2d ed. / 勝岡 洋治 他監訳 2001





図書館外観

関西医科大学附属図書館は大阪府守口市内にあり、京阪電鉄本線の滝井駅下車北西方面へ2分の交通利便の地にあります。

図書館の建物は昭和48年に建てられた5階建ての共同棟で、その内2階から4階までが中2階を含めて図書館部分となっています。さらに関西医科大学附属図書館には大阪府枚方市内の教養部（牧野キャンパス）に分館が、また大阪府寝屋川市内の香里病院内に分室があります。

図書館の開館時間は、平日午前9時から午後8時までで、土曜日は午前9時から午後5時までです。

さらに教員に対しては図書館員の常駐しない無人開館も行っており、予め登録された方に入館カードを発行しています。利用できる時間は平日午前6時から午前8時40分、および午後8時20分以降から午後10時までと、土曜日午前6時から午前8時40分、および午後5時20分以降から午後10時までです。

図書館の入口は3階で、入り口すぐにブラウジングコーナーがあります。右手にはカウンターがあり、その続きに事務室が壁を設けずにあります。反対側左手には新着図書・雑誌コーナーおよび未製本雑誌・二次資料のある閲覧室となっており、複写機室もあります。文献情報検索室もこの階にあり、端末4台を設置してあります。MEDLINE on Silver Platterは館内および分館等で利用できます。そのほかにCURRENT CONTENTSと医学中央雑誌が利用できます。また、視聴覚資料コーナーも設置されています。



情報検索コーナー

4階は、単行書1万冊ほどを配架した閲覧室です。この階の設備としては、国家試験対策用パソコンが備え付けられています。また情報センター学術部が運営する医学情報処理室があり教員、学生ともに利用できます。

下って2階は洋雑誌の書庫に、中2階は和雑誌の書庫になっています。また2階には教員用の個室閲覧室もあります。

同館では、平成12年度に図書館業務の電算化が導入され、現在継続してデータ入力中です。すでにOPACも公開されて、館内には合計3台のOPAC端末を設置されています。また、図書館のホームページも館員の方で運営されており、URLは“<http://www2.kmu.ac.jp/library/>”です。

平成13年度の計画としては、ブックディテクションの導入が行なわれます。また、Web医中誌を契約し図書館および分館・分室でも利用できるようになります。さらに今後の課題としては、分館・分室のネットワーク化された電算化が上げられています。

(宮本)

超入門Microsoft Visio 2000

落合重紀著 エクスナレッジムック 2000
山本隆一

図書館から「超入門Microsoft Visio 2000」というマニュアル本の書評を書くように依頼されました。はてさて、大阪医科大学図書館のOMNIBUSにVisioの話をして良いものかどうか悩むところです。

Visioは最近Microsoftが買い取ったソフトウェアでドキュメントプロセッサつまりワードプロセッサの親戚のようなソフトですが、対象となる文書はシステム構成図、プロジェクト組織図、ネットワーク構成図、データベース設計書など、情報工学関係の文書が主体です。そのほかにも地図なども得意と言ってよいでしょう。考えてみれば我々も論文で実験系のモデル図を書くことはありますし、例えば学会などを主宰する場合には組織図なども書きます。それほど頻度は高くはありませんが、Visioを使うと便利な場合もあるわけですね。医学情報処理センターにはすでに導入されています。医学情報処理センターの山本大助先生は「クラリスインパクト+ページメーカー」のWindows版と説明されているようです。

しばらく脱線をします。最近情報工学で重要視されていることに、ドキュメントとソフトウェアの一体化です。ソフトウェア（一般にはプログラムのことを指しますが、ここでは機械、つまりハードウェア以外のもの、運用規則とか、管理組織なども含めています。）は目的があって作られるわけですが、文字通り「柔らかい」ので試行錯誤によって作成されることがしばしばあります。大規模なソフトウェア、例えば病院の組織構成を変更するような場合、最初は比較的シンプルな理念のもとに構成を考えますが、実施上の不都合が生じたり欠員が生じたりで、小さな、あるいは時には大きな修正が加えられていきます。それにともなって最初のシンプルな理念にいろいろな要素が加わってきます。そしてある時点でその時の組織構成を説明しようとする、「なぜこうなっているのかわからない。」と言った部分がたくさんある、と言った状態になることがあります。プログラムの開発や大規模な実験モデルでもおなじようなことが起こりえます。そしてこうなると、組織管理でもプログラム設計でも実験モデルでもメンテナンスが著しく困難になります。そうしないためには系統的にドキュメントを管理し、変更や追加した理由などが合理的に管理できる必要があります。ワードプロセッサや手書きの文書でもできますが、そのために便利な機能を備えたツールがVisioです。Visio以外にもツールはありますが、Visioは人が読み易い図や文章などのドキュメントに力を入れた、人間よりのツールです。とは言ってもVisioもProfessional版やEnterprise版はデータベースの設計ぐらいまでは自動で行えます。このようなツールを使って機械や建物といったハードウェア以外の部分を合理的、効率的に管理し、情報技術を駆使していく組織がIT革命の「勝ち組」になるでしょうね。医療の世界でもIT革命を無視はできませんが、現在の日本では勝ち組や負け組は関係ないように見えます。しかし米国では事務処理の電子化を半ば強要するHIPAA法がまもなく発効し、医療もIT革命とIT競争の渦中に投げ入れられようとしています。さて効率化が求められながら実質的な施策が何もできていない日本ではどうなるのでしょうか。

話がどんどん脱線していきました。元に戻しましょう。Visioは組織管理、プロジェクト管理、モデル管理、ソフトウェア管理に最適なドキュメントプロセッサですが、単純な作図ソフトとしても使えます。使い慣れれば、そして実験モデルの記述や組織管理を行う人には大変便利なツールです。しかし、このツールを頻繁に用いる人は大阪医大ではそう多くないでしょう。たまたま使う人が大部分ではないでしょうか。このようなプログラムはたまたま使うと、なれないために最初は使いにくいものです。その時に役立つのが本書のような入門書です。本書はVisioを作図ツールとして扱っていて、豊富な例を示し簡単に使えるように解説されています。例を見ればこんなときに使うと

便利、というのがよくわかると思います。せっかく医学情報処理センターに導入されていますので、本書を斜め読みして、使えそうなところがあればチャレンジしてみたいかがでしょうか。IT革命の「勝ち組」に入るセンスが身につくかも知れませんよ。

(やまもと・りゅういち 病院情報部助教授)

シンポジウム「EBMにおける医学薬学図書館員の役割」に参加して

田嶋泰子

平成12年11月16日、天理よろづ相談所病院に於いて、近畿地区医学図書館協議会及び日本薬学図書館協議会近畿・中国地区協議会共同開催によるシンポジウム「EBMにおける医学薬学図書館員の役割」に参加しました。

プログラムは、

「EBM推進への図書館の役割について考える」

奈良県立医科大学附属図書館司書 鈴木孝明氏

「EBM：その背景とLibrarianに求めるもの」

天理よろづ相談所医学研究所副所長 前谷俊三氏

「情報を吟味するポイント」

名古屋大学医学部救急医学助手 福岡敏雄氏

の三題の講演と質疑応答で構成されていました。

鈴木氏は、1999年に開催された「EBMリサーチライブラリアン・ワークショップ」への参加経験を基に、図書館員の立場から情報収集について話されました。即ち、巷には様々な情報があふれ、治療に関して、医師だけでなく患者自身にも適切な情報を得る必要が生じている。情報流通の現場にいる図書館員は、そのための援助を惜しんではならない。エビデンスレベルの高い情報についてよく知り、日頃から情報収集を心掛けることが必要だ。ということです。

前谷氏は、医学史的な立場から、証拠に基づく医療が提唱され、ランダム化比較試験が最高のエビデンスを提供すると考えられるに至った経緯について話されました。そしてこれからのLibrarianに求められるものとして、

digital libraryへの移行におけるnavigatorの役割

自らが必要十分な文献の収集

様々なapplicationを使いこなす

文献へのaccessから原データ、更には診療録へのaccess

そのために、医学のみならず、情報通信技術、生物統計学の知識と経験を積む

を、挙げられました。

最後の福岡氏は、入手した情報をいかに吟味していくか、でした。チェックポイントとして

その情報は信頼できるか - 基となった研究そのものが注意深く計画され、追跡調査は適切におこなわれたか

その情報の意味することは何か - 治療効果・統計学的信頼区間の問題

その情報は役にたちそうか - 自分の状況に当てはまるか

の三点をあげられました。

昨今の情報の増加量は驚異的であり、その中から本当に必要なものを見つけ出し、入手することが、切実に求められています。先生方のお話は、日常の仕事をごこなすのに精一杯の私共には、大変耳の痛いものでした。我々医学図書館員は、エビデンスを使う立場に近い場所にいることを自覚し、図書館という枠の中で与えられた仕事をするだけではなく、広く色々な方面にアンテナを広げ活動しなければいけないと思いました。

(たじま・やすこ 閲覧係)



1. 貸出・返却についてのお願い

図書・製本雑誌の貸出期間は二週間です。返却期限に遅れると遅れた日数分貸出停止のペナルティが付きます。図書につきましては、貸出期間の延長が、一回に限り可能ですので、期限内に、本を持ってカウンターまでおいでください。

返却の際は、必ずカウンターまたはブックポストにお返しください。返却手続きをせずに棚に戻されてしまいますと、いつまでも未返却の状態となりますので、ご注意ください。

2. 図書館内では、以下のことにご注意下さい

館内では飲食禁止です。飲食物の持ち込みもお断り致します。

館内では静粛に願います。

図書館は、ドクターや学生さん他いろいろな方がご利用になります。皆様が気持ち良く利用できるよう、ご協力ください。

3. 図書館カードについてのお願い

図書館をご利用になるには、図書館カードが必要です。いつも必ず携帯してください。

紛失された場合、落し物等発見された場合は、図書館カウンターまで、お届けください。

所属・身分等に変更があった場合、カードを新しくしますので、図書館までお知らせください。

図書館業務日誌

9月

6日(水) 日本薬学図書館協議会中堅職員研修会に館員参加

(於、京都ガーデンパレス)

7日(木) 日本医学図書館協会分担購入検討委員会(於、東大医学部)

日本医学図書館協会総務会

(於、協会中央事務局)

11日(月) 医学情報処理センター運営委員会(於、第二会議室)

21日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)

25日(月) 日本医学図書館協会企画・調査委員会(於、大阪市大医学部)

27日(水) - 29日(金)
第7回医学図書館研究会・継続教育コースに館員参加
(於、北海道医療大)

10月

19日(木) 日本医学図書館協会理事会・評議員会(於、東大医学部)

25日(水) 館報18号発行

27日(金) 大阪府済生会吹田病院職員が見学来館(三名)

11月

9日(木) 近畿地区医学図書館協議会例会(於、滋賀医大)

13日(月) - 15日(水)

電子図書館国際会議に館員参加

(於、京大図書館)

16日(木) 近畿地区医学図書館協議会シンポジウムに館員参加

(於、天理よろづ相談所)

27日(月) 新CAT/ILLシステム講習会に館員参加(於、京大農学部)

12月

6日(水) 日本医学図書館協会資料保存委員会(於、本学会議室)

14日(木) 図書館合同運営委員会(於、会議室)

19日(火) 日本医学図書館協会基礎研修会実行委員会(於、京都府立医大)

編 集 後 記

今回のトップ記事は竹中教授に、またエッセイは岡田助教授にお願いしました。

「二十一世紀の医療環境」のシリーズは、8回目になります。今回の館報の内容は、偶然「本」に関する記事が多くなりました。執筆者の方の「本」にかかわる思いを感じていただければ幸いです。表紙のカットは北村達郎氏にお願いしました。執筆者の方々にお礼申し上げます。また読者の方の投稿を歓迎いたします。

(茂幾)

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報」

No.19号 2001年2月15日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (0726) 83-1221

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社